

## 8Kの本質、そして表現すべきこととは

本誌主催「第9回 4K・8K OlympAc」が7月20日、東京・大田区のアストロデザイン本社ホールで開催された。今回の主題となるのはもちろん、新たにタイトルに加わった「8K」。8Kが革新する画質の価値とは何か、最新映像技術がもたらすメリットとは何か。そして、今後の制作環境はどのように変化していくのか。4時間半にわたり、さまざまな講義と議論が展開された。

(レポート：高瀬徹朗・本誌レポーター、写真：川津貴信)

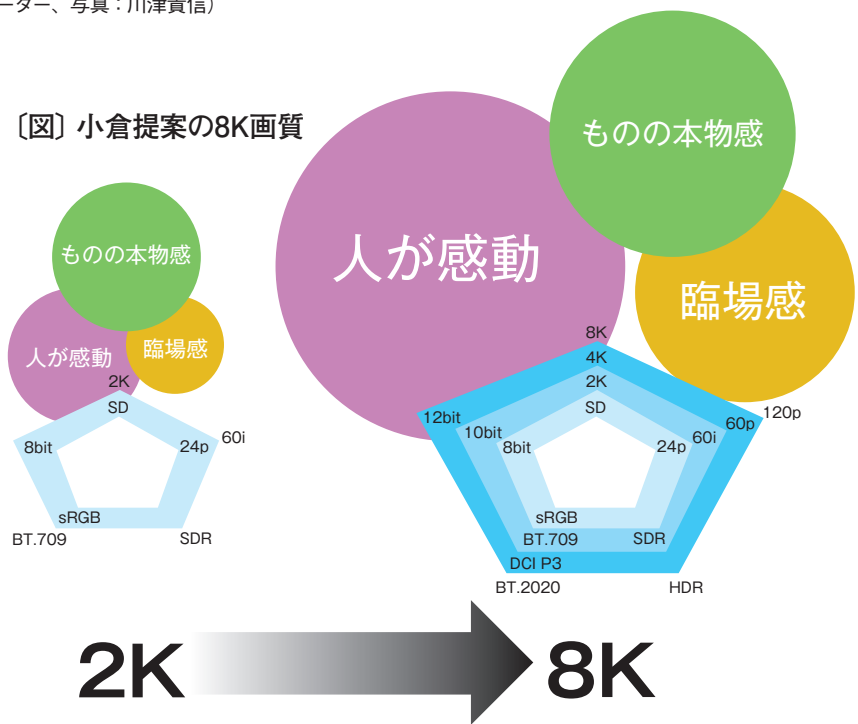
### ソニー・小倉氏が示す「画質五角形+アルファ」評価

本イベント呼びかけ人の一人、麻倉怜士氏の「8Kの本質とは何か」という議題に応じて最初に登壇したのは、ソニービジュアルプロダクツ技術戦略室の小倉敏之氏。テーマはずばり、8K画質理論の構築だ。

小倉氏が示したのは「画質五角形評価」。SDから2K、4K、そして8Kへと至る映像フォーマットの進化を「解像度」「フレームレート」「階調」「色域」「輝度範囲」という画質の5要素において評価し、視覚的にも進化をわかりやすく示したグラフだ〔図〕。

このグラフにのっとると、求められる最大値は「8K 120p 12bit BT.2020対応HDR」ということになる。一方、1月のCESでソニーが次世代高画質プロセ

〔図〕小倉提案の8K画質



ッサーの技術参考展示として紹介した「X1 Ultimate HDR 8Kディスプレイ」のデモにおいても、フレームレート、ビット

レートが最大値に達していない。

それでも先の展示が現状最高レベルであることは事実であり、「持てる技術



デジタルハリウッド大学の  
杉山知之学長



デジタルメディア評論家の  
麻倉怜士氏



ソニービジュアルプロダク  
ツの小倉敏之氏



キュー・テックの  
小池俊久氏